Topics | 九州

# タイトル　万国津梁によって築かれた首里城と城下町の豊かな関係

## 中山門喪失や隣接道路拡幅により「首里高裏門通り」と呼ばれている綾門大道の正面性再現

小野　尋子　　琉球大学・教授

炎をあげる首里城の映像を見て、皆、茫然自失とし、焦燥感すら感じた。それほど、私たちは首里城を「歴史的建造物」としてではなく、自らの精神的支柱として捉えていた。

首里城焼失の報を受けて、琉球大学でも、西田睦学長を中心に「首里城復興学術ネットワーク会議」が立ち上がり、筆者の城下町に関する研究テーマも採択された。

首里城の復興では、都市計画の専門家として城下町の都市の変遷を研究したいと考えた。城は治世・外交の場であることから、当代随一の文化・芸能が集積する。城下町には少なからず城と関連した有形・無形の文化が息づいているからだ。城下町との一体的な整備の重要性は地元行政や首里まちづくり研究会でも議論されていたので、協力しながら研究を進めた。

研究では首里城の城郭内の使われ方の変遷と城郭外市街地の変遷について、15 世紀から現代までにわたって史料を集め、戦後については地図やヒアリング等で補足しながら調べたが、大正時代の文化財指定から外れて、維持ができず取り壊された中山門消失がきっかけとなり、首里城に至るまでの道として「綾門大道」と、現在の「龍潭通り」の正面性が逆転したことが印象的であった。

県外城下町の形成は江戸時代（265 年間）であるが、沖縄では第二尚氏の尚円即位の 1470 年から 1879 年の廃藩置県と首里城明け渡しまでで 409 年、按司の集居策が進められた 1500 年頃から考えても 370 年近く平和な治世が続き、琉球王朝文化や首里城下町が形成された。その平和に裏付けらえた大きな特徴が、按司の集居と世継ぎである王子の居が城郭外に築かれた事であろう。城郭外に王族のしかも世継ぎが居を構える事は相当珍しい事例であり、結果として世子殿である中山門横の中城御殿や同じく王族が利用された大美御殿のある所から守礼門までは、香粉道（こーぐーみち）というおそらく世界最古の道路舗装がなされていた。中山門を抜けると、そこには白く陽光を反射する当時にあって土埃が立たない、舗装された道があったことは、訪れた人の心象としては、城下町の領域性を感じさせるに十分な道であったで、城下の農村とは全くことなる沿道景観が築かれていたであろう

19 世紀の琉球王国時代を描写したとされる沖縄県立博物館・美術館に収蔵の「首里那覇港図屏風　八曲一隻」を見てみよう。この屏風は、琉球王朝からの土産として贈呈されたものとされており、収蔵由来も県外在住の方からの寄贈となっている。那覇港から首里城までを描いた構図の一部ではあるが、琉球国司官が先導しながら薩摩藩の役人が乗る駕籠が第一の坊門を抜けて綾門大道を通りながら守礼門に向かう姿が厳かに描かれている。

中山門を入ってすぐ左手には、世子殿であった中城御殿が描かれ、そして首里城が黒く描写されており、絵図などにある黒い首里城は朱塗の塗りなおしの際の下地が出ているものという説と、さらに記録に残る首里城最後の重修工事が 1864 年であったことを考えると、1860 年頃である可能性がある。

綾門大道は玉陵や御殿、寺院等の緑が活き活きと描かれ、大きな幅員を持ち、格式の高い、まさに正面の道として描かれている。

首里城の復元では、1712 年頃のもっとも王朝として栄えた時代の首里城の姿があったとされている。第一の坊門である中山門の復元と、緑と一体となった、城下の厳かな綾門大道の再現が望まれる。